甲第46号証

県内議論の深化必要／遺骨返還　各大学と連携模索を

琉球新報　2017.08.05　琉球新報朝刊　26頁　２社　1版　(全688字)

＜解説＞

戦前、旧帝国大学の研究者らが持ち出した琉球人の遺骨について、台湾の国立台湾大学が６３体を保管していることを明らかにし、返還する意向を示した。今回、中華琉球研究会と琉球民族遺骨返還研究会の求めに応じ返還する意向を示した背景には、先住民族への遺骨返還が世界的な潮流となっていることに加え、台湾で研究者と国会議員が連携して取り組んだことが功を奏した。（１面に関連）

台湾大学にある琉球人遺骨には「運天」と記されたものがあり、今帰仁村の百按司（むむじゃな）墓から持ち出されたと考えられている。人類学者の金関丈夫氏が京都帝国大学助教授を務めていた１９２８～２９年に百按司墓で発掘した遺骨を、３４年に台湾大に赴任した前後に持ち込んだとみられる。

さらに台湾大学には日本の植民地時代に、研究者らが持ち出した台湾先住民の遺骨も保管されている。頭蓋骨だけで１５８０体余が確認されている。うち平埔族１２０体、タイヤル族１４５体、ブヌン族４６体、ヤミ族１０体、パイワン族６体などがある。台湾の研究者や国会議員が沖縄と台湾の双方に共通する課題として取り組んだことが、今回の結果につながった。

一方で台湾大学は返還の具体的な道筋は示しておらず、今後も沖縄と台湾の研究者らが連携して働き掛ける必要がある。そして課題は沖縄側にも多い。旧帝国大学が保管する琉球人遺骨について、県内では研究者や市民団体が返還を働き掛けているが、台湾と違って国会や県議会では特に議論されていない。国内、県内でさらに議論を深めるとともに、県も台湾大学や京都大学に情報提供を求めるなど対応を検討する必要がある。（宮城隆尋）

琉球新報社

本サービスにおける著作権および一切の権利は株式会社ジー・サーチまたはその情報提供社に帰属します。
本サービスの出力結果を複製、複写、出版、販売または第三者に対し配布することは禁止されています。